

解説

本書は J. Krishnamurti: *Letters to a Young Friend: Happy is the Man Who is Nothing*, Krishnamurti Foundation Trust, 2004 の全訳です。元々はブル・ジャヤカール著『クリシュナムルティ伝 *Krishnamurti: A Biography*, 1986』(邦訳なし)以下『伝記』の第二十章として発表されたもので、本書はこの章だけを独立させたものです。この『伝記』は五〇〇ページ余りの大著なので邦訳刊行は容易ではありませんが、以前ざっと目を通したとき、この章にはクリシュナムルティの他の著書にはない独特の味わいがあり、ぜひ紹介したいと思っていたところ、今回アメリカで単行本として出版されたので、邦訳刊行することにしたものです。

ブル・ジャヤカールは『伝記』第二十三章の冒頭で、クリシュナムルティは以下の一連の手紙を、「彼の許を訪れたとき心身ともに傷ついていたある若い友人に宛てて書いた。これらの手紙は一九四八年六月から一九六〇年三月にかけて書かれたものである」と記しています。この友人とは、実はジャヤカールの妹、ナンディーニ・メータのことで

す。彼女はどのような状況の中でどのように傷ついていたのか？ それを知ることは、本書に収められた手紙の内容をより深く理解するために不可欠だと思われるので、伝記に記された関連箇所をたどることによってその真相に迫ってみたいと思います。

その前に、その背景を知るため、クリシナムルティが祖国インドをどう思っていたのか、同国人とどのような関係を持つようとしていたのかをざっと見ておこうと思います。一九二九年、自らを長とする 星の教団 を解散したその同じ年に、彼は「自由の真の敵」と題する一般向けトークをインドで行なっています。これは、三十四歳の彼がイギリスの植民地として（しんぎん）していた祖国インドがたどるべき未来を遠大なるビジョンを踏まえて示唆しているという点できわめて貴重な資料なので、以下にそのままご紹介しておきます。彼は 星の教団 の解散宣言を「私の唯一の関心は人間を絶対的、かつ無条件に自由にするものである」という言葉で締めくくっていますが、以下のトークにはその願いがそのまま込められていることがわかります。

内なる自由と外なる自由を分離することはできない。生はいかなる国よりも偉大である。一国が真に自由になれるのは、生より深い法則を悟り、それに適合したときである。この観点から見れば、絶対に自由な国はいまのところどこにもない。ただし政治的自由がある場合には、生の創造的な流れを阻害する理不尽な制約からの一定の自由があ

ることは確かである。自由の眞の敵は何か？ それは死んだ伝統であり、使い古された過去の時代の公式によつて現在の生活をがんじがらめにし、人々に中古品の人生を強いることである。そしてインドほど伝統が重くのしかかっている国は他にない。これがインドの本当の問題である。それを解決すれば、インドを沈滞させている他のあらゆるものは朝霧のように消散するであらう。生の法則を欺くことはできない。内なる生を解放しなかつた民族あるいは国は、眞の意味での自由を実現することはできない。で、眞の内的自由が実現されないかぎり、たとえ一見して外面的自由と思われるものを手に入れても、味わえばその中身は苦いことがわかるであらう。

これは厳しい教訓である。が、欲するものを得るためにインドがこの教訓を学ぶことを余儀なくされ、試練をくぐり抜けた暁には、すっかり清められた姿を再び現わすであらう。これがインドにとつての眞の希望である。インドの魂は、獄舎につながれた偉大な魂である。それを解放すれば、他に並びなき巨人が出現するであらう。再生したインドは、全世界の再生のために大きく寄与するであらう。インドにはすばらしい靈的遺産がある。が、それは色褪せ、生気をなくしている。なぜか？ 他者への眞の愛情と思ひやりの精神という一事を欠いているからである。はるかなる過去からの伝統の果てに、いま何があるだらう？ とてつもない冷酷さと利己性、幼児婚、寡婦に対する非情な規制、女性一般への無慈悲な扱い、不可触賤民制度。これらはすべて、慣習の重みの下で

インド人の内面から通常の親切心や寛大さ、人間生活を快いものにするつましい感情が追い出されてしまったがゆえなのではないだろうか？ カーストとは何か？ 組織化された利己心 他人の間とは違っている、他人が持つていない何かを所有しているという意識 の制度以外のなものでもないのではないだろうか？ そしていま、インドはこれら諸々の遺産の重みの下でうめいている。

が、重要なのは、それらはインドの遺産の全部ではなく、単に死んだ部分にすぎないということである。その下にはインドの真の遺産、生きた部分、過去からの真の遺産が埋っている。そしてそれは、インドの本性の根底にある「解放への天才」以外のなものでもない。インドの魂からすべての付着物を剥ぎ取りさえすれば、そこに深い無執着と真実なるものへの深い感性が依然として力強く生きていることを見出すであろう「文末「参考」を参照」。いま蘇らせなければならぬのはインドのこの深い魂であり、そしてそれこそは、もし復活させられ、自己表現の自由を与えられれば、全世界の再生のミラクルを起こしうるのである。なぜなら、そのような精神にとって不可能なことはないからである。そしてそれはインドの政治的自由をもたらすだけでなく、もっとはるかに深遠なこととして、インドを全世界の霊的中心およびダイナモにするであろう。

では、この覚醒のためには何が必要だろうか？ まず第一に、本当に真摯な心、自分の短所を正直に認める力であり、第二に、明晰なビジョンから起こるべき不満の熱情であ

る。そしてさらに、なんとしても自分の家を速やかに整頓し、現在の必要を古い制約より優先しようとする決然たる態度である。足枷を引きずり続ける時代は終わった。冷徹な外国人の視線に耐えられないような旧態依然たる日常生活の恥辱に目覚め、それらを体のよい言葉で覆い隠すことの不毛に気づかなければならない。要するに、インドを真実との調和へと連れ戻さなければならない。そうすることによって初めて、インドに真の解放が訪れるであろう。

こうしたすべてにおいて、インドが他の国々から学ぶべき多くのことがある。何も学ぶべきことなどないと自惚れていてはならない。物質生活の洗練と清潔さ、省力装置、社会的自由、建設的組織、協力精神、公民的義務感などの点で、西洋から学ぶべき多くの教訓がある。自己完成のためには謙虚に多くを学び、そして学び終われば、今度はこちらから教えることができるようになる。なぜなら、靈的に目覚めたインドが与えることができる教訓があるからである。他のいかなる国よりもインドは、物質生活が目に見えない偉大な靈的秩序に依存しているということを人類に示すことができる。他のいかなる国よりもインドは、幸福は所有ではなく、外面生活と内なる靈の生活との調和にあることを示すことができる。が、教えるためには、まずその権利を確保しなければならぬ。そしてそれは、国民生活のあらゆる細部を一組の古めかしい訓戒に照らしてではなく、今日の常識と正しい感情に照らして全面的に見直すことによってのみ可能であ

る。これが、インドの解放にとって必要な第一歩なのである。

クリシナムルティは、インド再生への具体的な働きかけの一步として、一九三〇年、トリチノポリー「南インド南東部のタミルナドゥ州中部の都市」で講演会を開き、主にバラモン階級に属する大学生たちにインドにおける新しい教育の可能性について語っています。なぜなら、インド沈滞の主因は、インドを外面的・内面的に支配してきたバラモン階級にあり、したがってクリシナムルティは、その子弟たる大学生たちが自分たちが陥っている事態に気づくのに手を貸し、かくして自己解放の必要を痛感し、自己刷新をはかるべく促すことが急務だと感じたからです。このトーク中で彼は、教育の目的について次のように述べています。

教育の目的とは何なのでしょう？ それを要約すればこうなるでしょう。あなた自身の個別的独自性（インディビデュアル・ユニークネス）を伸ばすことであつて、あなた方を社会構造を少しも動揺させることなく働く機械にすることではない。あなた方の独自性を伸ばすためには、あなた方の十分な能力を伸ばすための環境を整え、それによつてあなた方の特定の偉大さ、特定の考え、ひいては独自性を伸ばすことができるようにしなければなりません。

モザイク画をご存じでしょう。それはたくさんの彩色された石から成っており、芸術家はそれらすべての小さな石を選び、様々な形の小さな彩色された石を組み合わせて絵に仕上げるのです。各々の石は色と形が完璧でなければなりません。そのとき初めてそれは全体と調和することができますからです。同様にして、あなた方の各々は、本当に教育されて初めて全体と調和するでしょう。ちょうどそれらの石が色と形が完璧でなければならぬように、あなた方は自己表現が完璧でなければならぬのです。それを伸ばすためには、あなた方が身体的、感情的、精神的に伸びることができるような機会を与えてくれる適切な環境を幼い頃から持ち、その自然な状態の中で恐怖なしに、邪魔されることなく成長することができ、何が本質的かについてのあなた方の知覚が完全にあなた方に任され、他人によって支配されないようにすることが必要です。個人の独自性、豊かさを十分に伸ばすことは混乱を意味するものではありません。現在、インド文明全体が、というか、事実上全世界の文明が、混乱しています。現在以上にひどい混乱はかつてなかったのです。

真の教育は、恐怖なしに個人が自然に発達するための機会を与え、かくして彼が自分の能力、自分の人生観を自分自身の自然なやり方に従って表現するようにさせるべきです。それゆえ、学校、教育の役割は、個人が直接的に、単純に、充分に考え、ひいては行動するのに必要な環境を創出することなのです。

が、実際はどうなっているでしょう？

あなた方は精神的、感情的、身体的に慰安を求めており、そしてこの慰安への願いから恐怖が起こるのです。精神的慰安を求めるやいなや、あなた方は何の葛藤もない静かな一隅を生の中に確保しようという願いを生み出すのです。あなた方はその閑居から踏み出すことを恐れるようになりますが、しかし生はあなた方が独りきりで閑居していることを許しません。そのように、何らかの形　知的、感情的、または身体的な　で慰安を求めるやいなや、あなた方は恐怖　生への恐れ、葛藤への恐れ、苦闘への恐れ、新しい経験や冒険への恐れ　を生み出してしまふのです。思うに、それがインドの学生が置かれている状況なのです。あなた方は冒険を恐れ、隣人とは異なることを恐れ、社会の既成の法に違反する考えを抱くことを恐れ、権威を恐れ、伝統を恐れています。あなた方は自分が伝統によって縛られていないと思うかもしれませんが、しかしあなた方への賤（しつけ）、あなた方が与えられてきた教育は、絶えずこの冒険心をなくさせ、妨げる方に向かう傾向があるのです。結局、あなた方が英知を高度に目覚めさせておくのは、絶えざる格闘、耐えざる奮闘によってなのです。そのような英知は直観であり、それが人生の唯一の導きの杖、唯一の基準であるべきです。そのような英知、

そのような導きの杖を持つには、あなた方は冒険心を持ち、無謀で乱雑な経験ではなく、意図的な経験をしようとする願いを持たねばならないのです。冒険を求める心、自分の生の表現、すなわち自己表現を求める心は、インドのどの学校や大学でも妨げられています。自由な自己表現への恐れが生徒たちに教え込まれ、彼らは自己表現する機会を与えられません。

また、別の箇所でも次のように述べています。

現在の教育の実情を調べてみましょう。学校や大学で何が起きているのでしょうか？ 幼少の頃から家庭で、それから学校で、恐れ 両親への恐れ、伝統への恐れ、試験に合格しないことへの恐れ、職にありつけないこと等々への恐れ が教え込まれていることに私たちは気づきます。そのように、幼い頃からずっと、教育の全背景が恐怖なのであり、そして恐怖があるところでは、すべての進取の気象は圧殺されてしまうのです。結局、真の教育の目的は機械を生み出すことではなく、進取の気象を持ち、自分の力で充分に考え、それによって自発的に自己表現できる人々を生み出すことです。大学は、あたかも多数のフォード車を生産するように、文学士、文学修士、法学士などを生み出しています。

確がバーナード・ショーだと思うのですが、自分が一度も大学に行かなかったことは幸運だった、なぜなら、もしそうしていたら自分の思考力は駄目にされていただろうからと言ったそうです。文学士や文学修士たちは書物の知識を持っているかもしれない。それは間違いないでしょう。彼らは、これこれの王がいつ生まれ、いつ死んだか、いつこれこれの戦争が起こったかを知っており、その類(たぐい)のことを熟知していません。が、彼らは生とのいかなる接触も持っていません。彼らの精神はまったく未熟なのです。

あなた方は、自分の精神を知識や伝統でいっぱいにした最も宗教的な人間、最も伝統的な人間であり、あなた方の全人生観はそれ一色に塗りつぶされているかもしれない。が、生は保守的、伝統的、静的であるように定められているわけではありません。生はあなた方が自分自身を豊かにし、自分自身を表現し、そしてその表現において自由でダイナミックであるよう願います。創造し、ダイナミックに生きる力なしに文学士や事務員になって何の役に立つのでしょうか？ いかにも由々しきことが学生としてのあなた方に起こりつつあるか、あなた方は気づいていないのです。あなた方は多くの学位を持つかもしれませんが、しかしそれらの学位獲得の過程で探究心と生への関心、生の熱情があなた方からすっかり奪い去られてきたのです。あなた方は紋切り型の仕方しか考えられなくなっています。自分自身がどんな状態に置かれているか、気づくようにして

こらんなさい。で、いかにそれがひどいものか、鈍重で、吐き気を催させるものか、気づくやいなや、あなた方はそれを改め始めるでしょう。

クリシユナムルティはまた、バラモン支配下のインドの現状について、次のような手厳しい指摘を行なっています。

結局、あなた方は何によつて国を判断しますか？ 事務員の数によつてではなく、芸術家と詩人の数によつて、創造的で、思慮深く、真に教養のある人々の数によつてです。目下のところ、教育はことごとく冒険心を奪い去り、この国を事務員の国、職場から追い出されることを恐れる事務員根性の国、にしています。教育は真の人間を生み出さねばなりません。然るに、今のところほとんどの教育された人々の内面には恐怖心がはびこっているのです。彼らの収入が一ルピーだろうと、一〇〇ルピーだろうと。

それから、伝統的、知的に、私たちは手仕事や肉体労働を恥じます。自分の手で何かをすることは下品なことみなされるのです。なぜかと言えば、元々カースト制度があったからです。それが真の分業制度だった当時は、最高カーストの人間（バラモン）はスピリチュアル（真に宗教的）な人間であり、もっぱら教えることを義務としていた

のです。「訳注 古代バラモンは清浄であることと不殺生を特に重んじていたので、土中の生き物を殺すことを嫌って農業への従事を避けた」。が、今はそうではありません。今や、最高カーストの人々があらゆる職業に就いています。本来のカースト制度はなくなったのです。これらの事実から目をそむけようとしてもむだです。私たちはそれらありのままに見てみなければなりません。手仕事や肉体労働をしたがらなくなり、それができなくなるやいなや、あなた方の根性は奴隷的になるのです。あなた方が自分の手で何かをできるようにするやいなや、あなた方は外で戦い、自由に生きられるほど強い独立心を獲得するのです。

さらに彼は大学生ひいてはインド人の内面に目を向け、その生活の沈滞ぶりについて次のように指摘しています。

それからまた、私たちは悲しみや快や苦といったあらゆるものに無関心です。あなた方は、しばらくの間表面的に悲しみに心を動かされるかもしれませんが、しかしそれから抜け出すべく戦おうとはせず、単に理論づけるだけです。結局、真の英知の先鋒は行動です。悲しんでいる人は、理論づけたり、同じ場所に留まっていたりせず、それから抜け出そうとし、そして抜け出す過程で彼は本質的なものをめざして苦闘し、それを選

ほうとします。が、あなた方が家庭生活で何をしているかよく見てもらいなさい。一つの家にもあまりにも多くの子供が生まれるのです」訳注　たくさんの子宝に恵まれることをパラムンは幸福の支柱の一つとみなしている。が、それはいわゆる貧乏人の子だくさんをもたらし、インドにおける人口急増の主因にもなっている。クリシナムルティにも十人近くの兄弟姉妹がいたが、多くは若くして死んだ。適切に面倒を見られないほど多く、その結果、無視され、病気が、不幸、悲しみを招くのです。が、その悲しみに対してあなた方は無頓着です。あなた方は情慾に駆られ、そして哀れな母親はその矢面（やおもて）に立たなければなりません。然るにあなた方は教育を受けた人間なのです　文学修士であり、偉い弁護士なのです！　私は皮肉を言っているではありません。それはあなた方の各々に直面しているのです。

結局、もしあなた方の教育がこれらの問題を解決しないとすれば、何がそれらを解決するのでしょうか？　ヨーロッパやアメリカでは、児童の養育にずっと多くの時間と思いが払われています。医者は、子供部屋を確保できるまでは子供を持つべきではないとさえ提唱しているのです。が、インドでは何が起こっているか見てもらいなさい。子供たちはどこで寝ても、どんな物を食べてもおかまいなしで、躰（しつけ）の全部が間違っているのです。誰に責任があるのでしょうか？　再び、文学士であり文学修士たちであつて、母親ではありません。なぜなら、あなた方は母親たちが良い教育を受けることを妨

げてきたからです。もしあなたがこのすべてに気づいたら、それを改めねばなりません。今日同意し、それから明日になるとこれまでとまったく同様に過ごすのではどうしようもないのです。世の中に、あらゆる家庭の中に、それほどひどい悲しみがあることがわからないとは！もしあなたがそれを改めることができないなら、あなた方の教育は何の役に立つのでしょうか？もしこれらのことが放置されたままなら、あなた方の学位は何の役に立つのでしょうか？

そして彼は、大学生たちがこつした状況を抜け出すにはどうしたらいいかについて、次のように述べています。

まず第一に、あなた方は自由に、自主的に考えることができなければなりません。とにかく自分で考えてみなければならぬのです。が、ある部屋であることを考え、他の部屋でそれとは違うことをすることは無駄です。それは偽善です。教育とは、考え、判断し、そして行動の結末を恐れずに、その思考と判断を行動の中で追求することを意味すべきです。これはインドの現状からはかけ離れています。あなた方は激しく、強く異議を唱えるかもしれませんが、それは問題ではありません。私はあなた方にこの光景を見てほしいのです。で、もしそれをご覧になれば、それを改めるかどうかはあなた方の

力がかかっています。インドの表情を改める力はあなた方の掌中にあるのです。私は愛国的になっただけではありません。単なる愛国心とは私は無関係です。ですから、私があなた方の愛国的熱情を目覚めさせて行動させようとしているなどと思わないでください。必要なことは単なる熱情ではなく、活発な関心と明晰な思考なのです。

そして彼はこのトークを、次のような励ましの言葉で締めくくっています。

ですから、もしあなた方が精神的、感情的、行動的に創造的でなければ、単に試験に合格し、数千ルピーを稼いでも無意味なのです。もしあなた方が単に歯車の歯として働いていれば、一国の文化に寄与できないのです。あなた方の国の文化に寄与し、あなた方の国およびあなた方自身を偉大で、力強くするためには、あなた方は自分自身の個性的な個性を伸ばさねばなりません。で、それが教育の目的なのです。

真に自由で、自立した、創造的な生き方へと促すこうした励ましの言葉を学生たちがどう受けとめたかは定かではありませんが、おそらくかなりの学生にとっては、彼らがこれから生きようとしていた伝統的で保守的な生き方に冷水を浴びせかける、「破壊的」で「危険」なものと感じられたのではないのでしょうか。多くのインド人の目には、クリシュ

ナムルティはまさに「破壊の神・シヴァ」を彷彿とさせたのではないかと思われます。これに関連するものとして、拙訳『楽園の蛇　インド巡礼記』(ミゲール・セラノ著　平河出版社　一九八四年)の一節を紹介しておきます。

クリシュナムルティの行為のほとんどは、必然的に否定と放棄を中心にしたものであった。彼はオランダで　星の教団　を解散し、自分は救世主ではないと公に宣言し、さらにはあらゆる教派と伝統の師、導師、ならびにあらゆる哲学と宗教の不倶戴天の敵となった。彼は世界中をめぐり歩きつつ、あらゆるものを粉碎し、あらゆるものに反逆してきたのである。その姿は、新たな創造的真空を生みだすために偉大なる破壊の踊りを舞う、破壊神シヴァを彷彿とさせる。

これはいささか不正確で、文中の「あらゆるもの」は「虚偽と非本質的なものに立脚したあらゆるもの」と言い換える必要がありますが、ともあれ彼の持つ創造性と背中合わせの破壊的な側面を描いたものとして参考になると思います。彼自身は自分のことを「教師」として自認しており、それは具体的には次のような意味での教師としてでした。

なぜわれわれは生きているのか、なぜわれわれは苦闘しているのか、なぜわれわれは

教育を施しているのか、なぜ戦争があるのか、なぜ人と人との間の宗派的紛争があるのか？ こういうすべての問題を研究し、英知を働かせること、それこそは真の教師の役割なのです。自分自身には何ものも求めず、教育を地位、権勢、権威を得るための手段として用いない教師、利益のためではなく、一定の方針に沿ってではなしに真に教えるところの教師、自分自身の内に英知を培っているがゆえに生徒の内部にも英知を育て、目覚ましている教師。確かにこのような教師こそは文明の中で主要な居場所を持っているのです。なぜなら結局のところ、すべての偉大な文明は、技師や技術者ではなく、教師の上に築かれたからです。技師や技術者は絶対に必要ですが、しかし道徳的、倫理的英知を目覚めさせる者こそは、明らかに一義的に重要なのです。そして彼らは、自分自身には何ひとつ求めず、社会を超越し、政府の管理下に収まっておらず、そして常に何らかのパターンにのっとった行動である社会的行動の強制から自由なとき、そのときはじめて道徳的高潔さ、地位、権勢、権威への願望からの自由を持ちうるのです。

ですから、社会とその要求の限界を超越して、教師は新しい文化、新しい構造、新しい文明を創造しなければなりません。

おそらく彼は、教えることをもって天職としていた大昔のバラモンの末裔であることを自覚していたのではないかと思えます。ただし、彼の祖先をがんじがらめに縛っていた

諸々の制約を脱した、真に自由な教師として。

彼の祖先は生き物に危害を加えないこと、富に執着しないこと、清浄な生活を重んじることなど、多くの美点を持っていたのですが、しかし一方では、無数の不必要な規則で自らにも他者にも不自由な生活を強いるようになっていったのです。今もなおインドの社会体制、人々の価値観と生活の深層部を支配している『マヌ法典』、渡瀬信之著 中公新書 一九九〇年）は、例えば、夫婦に関して次のように定めています。

「夫婦」は死ぬまでお互いを裏切ってはならない。一言で言えば、これが夫婦にとつての最高のダルマであると知るべし。

これについて、渡瀬氏は次のように解説しています。「家庭における妻の地位は大きい。それは一見したところ夫と対等であるかのような錯覚を起こさせる。しかしながらそのような妻の地位は、実際には、夫に従属して、夫に忠実と貞節を尽くす妻である限りにおいて約束されるものであった。『マヌ法典』……の作者たちには抜きがたい根本的な女性観があった。すなわち、女に自立はなく、その生涯を通じて女は男に従属するべきであるという考えである。」「これを最も露骨に示したものが以下の掟です。

幼いときは父の、若いときは夫の、夫が死んだときは息子の支配下に入るべし。女は独立を享受してはならない。

そもそも結婚とは父が娘を花婿に「与える」行為であり、「与える」という行為によって「夫の妻にたいする」所有権が生じる」と見なされたのです。そして妻には貞節と従属が強く求められたのですが、実は、その奥には法典作者の次のような女性観があったのです。「女は魅力的で、男を惑わし駄目にする。しかも女たちは、男の容姿も年齢も気にせず、ただ男であるというだけで彼らを受け入れる。女たちは注意深く監視されても夫を裏切る。」

さらに妻の不貞が恐れられたのは、それが家の血統と繁栄を侵害する元凶のひとつだからです。「不貞は常に異なる血を家に持ち込む危険を孕んでいる。家にとっては、社会秩序の場合と異なり、不貞の相手が同一ヴァルナ（姓）バラモン、クシャトリア、ヴァイシヤ、シュードラ）かそうでないかは問題ではない。夫以外の血が入ること自体が問題である。『マヌ法典』は言う。妻は受け入れた者と似た息子を生む、それゆえに子孫が清浄であることのために注意し妻を監護すべきである。」ただし、「力づくによる監護は不可能であり、召し使いをつけて家に閉じ込めるなどは愚の骨頂である。最善の方法は妻が自分で自分を守ることであり、そのためには、妻が家における彼女の役割と意義を自覚す

るよつに遇することこそ肝要である。『マヌ法典』は、便法として、例えば収入と支出に關して係わりを持たせ、清め、ダルマ、料理、家具の管理等に彼女を参加させるなどを推奨する。」

一九四七年のインドとクリシュナムルティ

一九四七年にクリシュナムルティが久しぶりにインドを訪れたとき、ようやくにして英国による支配から独立し、さらに諸々の伝統の重荷の下から抜け出して新たな生き方をめざすべく動き始めていた一群の人々が彼を出迎えました。そして冒頭に述べた『伝記』の著者ププル・ジャヤカールを初めとするその一部が、インドでのクリシュナムルティの活動拠点となつた「クリシュナムルティ・インド財団」を設立すべく結集していつたのです。本書の手紙の受取人であるナンディーニ・メータもそうした人々の中にいました。ジャヤカールはインド独立当時の状況を次のように述べています。

一九四七年八月十五日、インドは独立し、ジャワハラル・ネルーが初代首相に就任した。過激ではあつたが根は非暴力的な独立闘争が、マハトマ・ガンディーによる指導下で二十世紀初頭から続けられていた。一九四四年までに、大英帝国の軍事力に対する非

暴力闘争の勇氣は、史上最も暴力的な戦争の後に復興すべく苦闘していた世界の人人に影響を与えた。

が、インドの独立はまた苦い余波をもたらした。それを達成するため、広大な亜大陸は分割され、北、西、東の領土が中核地帯から切り離され、新しいイスラム教国パキスタンが形成された。家族は引き裂かれ、友情はずたずたにされた。暴力が爆発した。虐殺、レイプ、略奪、放火が国境地方や後背地で目撃された。おびただしい人口移動が起こった。ヒンドゥー教徒たちは東方へ、イスラム教徒たちは西方へ。インドの新しい支配者たち　そのほとんどは人生の半ばを刑務所内で過ごしていた人々だった　は、炎上していた大陸に秩序をもたらし、かつて目撃されたことのない規模の難民問題に対処すべく、突然召集された。

そのインドの西の玄関口ボンベイ「現在のムンバイ」にクリシュナムルティが到着したのは、独立から二ヶ月後のことでした。古いインドは死につつあり、新しいインドは生みの苦しみと幻滅に襲われていたのです。インドの自由と分割とともに噴出した虐殺は、非暴力の教えの上に培われた精神に深い外傷を与えるものでした。これに対してクリシュナムルティは、カリフォルニアのオーハイで数年にわたり十分に英気を養い、神智学協会その他との古い絆を事実上断ち切り、苦悩する祖国インドの諸問題解決に手を貸すべく、ほぼ

単身でその中枢部へと歩み入ったのです。

ボンベイの彼のまわりには、政界、学界、文学界など様々な分野からの若者たちが参集しました。その多くは自由闘争に加わり、政治的英雄と認められていた若者たちでした。その彼らが直面したのが、インドの分割後に続いたおぞましい出来事だったのです。もちろん彼らは、英国の撤退後には、世俗主義（非宗教主義）、社会主義の倫理的価値に基づいた黄金時代が到来し、貧困に終止符が打たれるだろうという、当時多くの人々が抱いた甘い期待は持ち合わせていませんでした。彼らが実際に目の当たりにしたのは、政治的スローガンや大言壮語の奥にある野心、怨恨、貪欲の荒地地だったのです。政治的闘争の年中彼らを引っ張っていた理想はぼろに崩れ、彼らは混乱、矛盾、そして言わば窓のない壁に直面したのです。

彼らがクリシュナムルティのまわりに集まったのは、彼の存在から放たれる光輝と慈悲のためであり、自分たちが直面したり払い去ることもできない苦悩や失望のためであり、そして自分たちの人生に意味のある方向性を与えられずにいたからでした。まさにそのときクリシュナムルティは、ちょうど仏陀が修道士たちに「来れ、汝ら」と呼びかけたように、これらの若者たちに呼びかけたのです。

ナンディーニ・メータとの出会い

ボンベイの空港でクリシュナムルティを出迎えた人々の中に、名高い産業資本家、サー・チュニラル・メータがいました。彼は、かつてのボンベイ州「現在のマハラシトラおよびグジャラート州」にあつた総督諮問委員会の委員を任じたことがある要人でしたが、クリシュナムルティの熱烈な賞賛者だったので。帰宅後、チュニラルは息子の妻のナンディーニに、うつとりとした表情で「飛行機のタラップを降りてきた不思議なほど若々しい人物」が「一条の光のようにわれわれの方にやって来た」と語つたといふのです。もう五十二歳で、頭髪にはやや白いものが見られるものの、全身に活気をみなぎらせながら、背筋をびんと伸ばしてやや早足で歩いていたので、若々しく見えたのでしよう。

クリシュナムルティの滞在先は、カーミカエル・ロードのラタンシ・モラルジ邸で、ここは午前中は一般向けに開放されていました。チュニラル・メータとナンディーニが入つたときには、すでの多くの人が集まっています。ナンディーニはそのときの様子を次のように記しています。

私は、ややそわそわしたまま、隅っこに行き、床に坐りました。私は、遠くの方に、白いクルター「裾が長くゆるやかで襟のないインドのシャツ」をまとい、背筋をびんと伸ばして坐っている人を見ました。部屋は人々でいっぱい、Kは議論の最中でした。カカ

ジー「チュニル」はKの目の前に坐り、すぐに議論に加わりました。一分後、私の方ではないところに向いていたKの顔が私の方に向け、数秒間じっと私を見つめました。私にとって時間が止まりました。彼はまた元の方に向け直り、議論を続けました。しばしの後彼は再びこちらに目を向け、じっと私の目の中を覗き込み、そして再び時間が止まりました。Kは議論を続けました。しかし私は、何が言われていたのかまったく気づきませんでした。

やがて議論が終わり、人々は立ち去り始めました。私が立ち上がると、Kが私の前に立っているのに気づきました。Kが私に近づいてくるのを見て、カカジーは急いで近寄り、「息子の妻のナンディーニです」と私を紹介しました。クリシュナジは笑い始めました。それは微笑ではなく哄笑でした。これほど太く低い、朗々たる笑い声を聞いたことは一度もありませんでした。それはまるで、岩から岩へとぶつかりながら流れ下り、他の流れへと合する、ヒマラヤの流れのようでした。彼は尋ねました。「なぜここに来たのですか？」涙が、こらえきれずに、私の頬を流れ落ち始めました。彼は笑い続け、そして私の涙は流れ続けました。彼は私の手を取り、しっかりと握り締めました。再び彼は「なぜここに来たのですか？」と尋ね、そしてとうとう私は口をきくことがきたのです。涙の勢いは一向に収まりませんでした。「私はあなたにお会いするために三十年間待ったのです。「ナンディーニはこのとき三十歳だった」それから私の手を離して、彼は

手の平を私の頭に寄せ、数秒間それをそこに置いた。私は自分の涙によって彼に「プラム」敬意を込めた感謝」を表したのです。

車の中でカカジーはやや当惑気味に振り向いて、私に言いました。「彼に会ったことがあるのかね？ 彼の目にとまったというのは大変名誉なことです。慢心しないように。」私は、カカジーと一緒に毎日Kに会いに行きました。ある朝Kは言いました。「私を知りたいとは思いませんか？」私は応えませんでした。彼のことを知ることなどできそうにないと思っただのです。

こうして三児（二男一女）の母でもあるナンディーニとクリシュナムルティとの交流が始まったのですが、「あなたにお会いするために三十年間待ったのです」とまさに感激にむせびながら告げる若い美貌の人妻と、何やら意味ありげにその彼女の頭に手の平を寄せたクリシュナムルティとの間には、インド神話中でもとりわけ女性に人気のあるクリシュナ神「文末「参考2」を参照」と牧女ラーダとの出会いを彷彿とさせます。事実、現神智学協会会長のラーダ・バーニアが、若かりし頃、Kのことを神話に出てくる青き神クリシュナ神に、また自分のことをその神の誘いに応じる牧女ラーダに見立てたというエピソードが伝えられているほどですから、ナンディーニにもそんな思いがよぎったのではないかと想像してもさほど不自然ではないと思います。

ところで、ナンディーニに対して「私のことを知りたいとは思いませんか？」と別れ際に問いかけていますが、これはよく考えてみるととても奇妙です。ちよつと前まで精力的に議論し、終わった後ナンディーニを見つめて大笑いした人。その彼には教え以外に個人的に知られるべき何かがあるのだろうか？ 彼の問いかけは実はかなり微妙な意味合いを持っており、後述する「プロセス」と呼ばれる彼の内面生活の秘密の部分に関わつていたのです。それは、ラタンシ・モラルジ邸での三カ月にはわたる精力的なトークや質疑応答・討論からは伺い知ることのできない側面でした。おそらくクリシナムルティは、ナンディーニと姉のププルをプロセス中自分を見守ってくれる信頼できる立会人としてあらかじめ選んでおいたのでしょう。

ところで、『伝記』によると、この頃からクリシナムルティはみずからの教えを五通りの仕方で伝えるようになりました。すなわち、公開トーク、対話と討論、個人的面談（インタビュー）、散歩の途中または会食中にさりげなく示される洞察、および沈黙によつてです。とりわけ感動的なのは、彼に会いに来た人々に対して、年齢や性別に関わりなく、あたかも親しい友であるかのように振る舞っていることです。と同時に、言うべきことは率直に口にし、手厳しく問題点を指摘しています。

一九四八年　プロセスへの立ち会い

彼は一九四八年一月、ボンベイで公開トークを行っていますが、その会場はナンデーニの義父チュニラル・メータの広大な邸宅の芝生の上でした。「インドではいつもそうしていたように」彼はドーティーに真つ白なクルターという出で立ちで五百人ほどの参集者の前にしつらえられた演壇に坐り、彼らを見回しています。「サンニヤーシ、古い神智学協会会員、何人かの教授たち……がいたが、若者の姿はほとんど見かけられなかった。ただ、サー・チュニラル・メータの友人である裕福な豪商たちがいた」とジャヤカールは記しています。ガンデーの信奉者たちも何人か参加していたようです。

この頃クリシナムルティは、富者に対して容赦なく手厳しい言葉を浴びせかけていました。例えば、「あなた方は、神（ゴッド）とマモン「富の神」を混同することはできません。隣人を自分の思いどおりに使う人 搾取し、地上の富で夢中になっている人にとつては真実はないのです」といった具合に。これを聞いた人は、イエスの「山上の垂訓」中の次の訓戒を思い出したかもしれませぬ。「だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからできません。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」

思うに、それぞれの時代に少なくとも一人は、いかなるものにも屈することなく率直にものを言うことができる人がいなければならないのです。さもなければ、人類は真に正し

い方向感覚を喪失し、道に迷ってしまうであろうから。例えば、オウム真理教事件が起こったとき、わが国の仏教学界の指導的立場にあったある学者がこのカルト事件について率直な意見を述べるのを控えたのは、自分の研究活動を財政的に支援してくれたある仏教団体に配慮したからではないかと言われています。おそらく、うっかりしたことを言えば、一般に「教団」というもの自体に内在している危険性や問題点を間接的に批判することになりかねなかったからからです。

なお、一九四八年当時のクリシユナムルティのトークの特徴について、ジャヤカールは次のように述べています。いかに多くの聴衆を前にしていても、彼の凝視はグループとしての彼らにはなく、その一人ひとりに向けられ、直接のコミュニケーションと接触を可能にし、彼らを注意と気づきの場へと引き込む。その結果、それぞれの人がクリシユナムルティのことを、例えば悲しみに沈んでいる自分の手を握り、一緒に歩きながら精神と心、思考と感情の深みへと連れて行ってくれる友のように感じる事ができる（本書の手紙にも一貫して、そのような温かさが感じられます）。事実からのすべての逃避をブロックして、ねばり強く問題の所在をあげ、探りを入れ、探求を深めていく。聞いている一人ひとりに、あたかも鏡を覗き込むかのように、自分の内面の悲嘆、怒り、孤独を観察してみるように促す。ある思考と次の思考との間の間に留まり、各々の思考をその根っこ、その源へと押し戻してみるよう促す。すると思考はいわばその「首根っこ」をつかま

れ、自己増殖できなくなる。

クリシユナムルティはまた、自分の語る言葉を聞いている人々にだけではなく、会場とその周囲で起こっていること　鳥のさえずり、ひらひらと落ちていく葉、遠くで奏でられている横笛の音といった　にも気づく。内と外への同時的な気づき。内と外が包括的に見られ、聞かれる。それらが精神を通り抜けるがままにるので、何ものも排除されず、何ものによっても注意散漫にさせられない。あるのはただ存在の川、　あるがままの流れだけである。

ボンベイでの三ヶ月に及ぶ公開トーク、討論、質疑応答集会后、クリシユナムルティはマドラスに移動しました。そこでさらに三ヶ月ほどかけてボンベイでのものと同様の集会を開くためです。そして四月十八日に、ジャヤカールに手紙を書き、ナンディー二と一緒にマドラスに来るよう誘っています。ジャヤカールは、マドラスはまだ行ったことがなかったもので、誘いに応じ、ナンディー二もなんとか夫を説得して姉と一緒にマドラスを訪問したのです。姉妹は、クリシユナムルティを招待していたマダヴァチャリの案内で神智学協会を見学したり、リードピーターによる少年クリシユナの「発見」の場となったアディヤール海岸を散歩した後、マダヴァチャリ邸で一泊することになりました。そしてその晩姉妹が目撃したことを、ジャヤカールは次のように記しています。

夜遅く、私たちは彼が寝ていたベランダから聞こえるクリシュナジの呼び声に気づいて目を覚ました。彼の声は弱々しく響き、私たちは狼狽して、彼は病気になるているのだと思った。ひどくためらった末に、私たちはベランダに通じる戸口のところまで行き、彼に具合が悪いのかとたずねた。クリシュナジは誰かを呼んでいたが、その声はか細く、子供じみていた。彼はこう言い続けた。「クリシュナは行ってしまった。彼はいつ戻ってくるの？」彼の目は見開かれ、しかし何も見えてはいなかった。それから彼は私たちに気づいたようで、こつたずねた。「君はロザリンドなの？」それから、「ああ、そうだ、そうだ。彼は君を知っている。大丈夫だ。ここに座って、ここで待って。」そしてしばらくたってまた、「からだをひとりきりにしておいてはいけない。それに、こわがらないで。」それから声はまた「クリシュナ」を呼び始めた。彼の手は口に押し当てられ、それから彼はこう言ったものだった。「彼は、彼を呼んではいけないと言ったんだ。」それから子供の声で、「いつ彼は戻ってくるの？　すぐ戻るのかしら？」これはしばらく続いた。静かになったかと思うと、「クリシュナ」を求めて叫び、それから今度は自分自身を叱るのである。

一時間ほどたって、彼の声は喜ばしげなものになった。「彼が戻ってきた。君は彼らに会ったことがある？　彼らはここにいて、清らかそのものだ。」彼の手は満足を表わしていた。それからその声は変わり、それは再びなじみのあるクリシュナジの声に戻っ

ていた。彼は上半身を起こし、私たちを起こしてしまったことを詫びた。彼は私たちに、自分の部屋に戻って休むように言った。その奇妙さは、全体、私たちを当惑させた。私たちは茫然自失の状態で、一晩中眠れなかった。翌朝、朝食のとき、彼ははつらつとして、若返ったように見えた。私たちは彼に昨夜の出来事についてたずねた。彼は笑って、自分は知らないと言った。私たちは起きたことを描写できただろうか？ 私たちはそうした。彼は、いつか私たちはそのことについて話し合うだろうが、そのときまでに、私たちは彼がそのことについてそれ以上議論したがるのはなぜなのか、理解するようになっていよう、と言った。

姉妹はクリシュナムルティの内面のミステリーの一端を初めて目撃したのです。これは、ボンベイで「私のことを知りたいとは思いませんか？」とナンディーニに言ったとき彼が意味していたことの一端だったのだろうか？ 様々な疑問を抱いたまま、姉妹は翌日ボンベイに戻っています。

一方クリシュナムルティの方は、五月と六月はマドラスの南西方向にある避暑地オータカムンド「略称オーティー」で静養することに決めました。「マドラスを州都とする」タミルナドウ州とその西隣のケララ州との境の一部を成す高度二千四百メートルのニルギリ丘陵地帯にあるヒル・ステーション「イギリス人たちが政府軍・役人の避暑のために作った駐留地」で

す。そしてリシュナムルティは、ボンベイに戻ったばかりのナンディーニとジャヤカールに、オーティーに来るように誘っています。ジャヤカールには若干の時間的・金銭的ゆとりがあつたからまだしも、いわば専業主婦であつたナンディーニにとっては、これは大変な難題でした。彼女は当時夫との仲がますます疎くなりつつあり、しかもインドの保守的で正統的なバラモンの家庭の常として、財布の紐は全部夫が握っていました。メータ自体は裕福でしたが、妻の彼女には自由に使えるお金は事実上なかつたのです。もしクリシュナムルティの熱心な理解者である義父のチュニラル・メータの助力がなかつたら、オーティーへの旅は実現しなかつたでしょう。

ともあれ、この一見して強引な誘いに応じて、一行　ナンディーニと二人の息子、義父のチュニラル・メータ、ジャヤカールと一人娘のラディカ　はオーティーに向かい、五月の第三週に到着しました。

当時オーティーにはネルー首相が総督官邸に滞在しており、秘書を通じてクリシュナムルティとの会見を求め、クリシュナムルティはこれに応じて官邸に向かっています。後日彼はこの一代の政治家について、次のような印象を書き留めています。

彼は非常に有名な政治家で、現実的で、燃えるように誠実で、そして熱烈なまでに愛国的であつた。偏狭でも利己的でもないこの人物の野心は、彼自身ではなく、ある理

想、民衆のためのものであった。彼はたんなる流暢な熱弁家でも、票集め屋でもなかった。彼は自分の大義のために苦難の道を歩んできたが、不思議にも陰気ではなかった。彼は、政治家というよりはむしろ学者のようであった。しかし政治は彼にとつて必要欠くべからざるものであり、そして彼の指導する党は、ややびくびくしながらではあったが、彼に従っていた。彼は夢想家であったが、政治のためにそういつたすべてを捨て去つてきたのである。(新装版『生と覚醒のコメンタリー・第1巻』春秋社 二〇〇五年)

ジャヤカールの『伝記』は、この会見記を含め、インド現代史の貴重な記録になっています。ところが彼女はまた、ネルー首相との会見からは想像もつかないようなクリシュナムルティの別の側面である「プロセス」に、ナンディーニと一緒に立ち会うことにもなったのです。彼女は自分たち二人が選ばれた理由について、次のように推測しています。一九二二年以来、プロセスに見舞われた都度、彼は常に二人の信頼できる知人に立ち会つてもらつており、同様に「彼の」体を守ることが、脳内の、以前には働いていなかった領域を切り開くとつてもないエネルギーの変容をクリシュナジが遂げている間中立ち会つていた人々の主な、そして多分唯一の役目だったのである。これらの人々とクリシュナジとの関係にそれ以外の意義を与えることは、……適切ではない。唯一の妥当な点は、彼らがクリシュナジが信頼しており、体が損なわれないように見守り、とりわけ、起こっているこ

とに対して強い感情的反応、恐怖等々を起さずにいられる人であることである。」

一連の「出来事」は五月二十八または二十九日から六月二十日までの三週間に及んだと記されています。姉妹はその立会人かつ目撃者として記録を残したのです。この出来事とその意義については、最近邦訳が刊行された初の本格的な研究書『クリシユナムルティとは誰だったのか その内面のミステリー』アリエル・サナト著 コスモス・ライブラリー（二〇〇五年）をご参照ください。ここでは、それとあまり重複しない程度に、姉妹の目撃録から窺い知ることができることの一部を紹介するに留めます。

まず、首筋や頭頂部や背骨の激痛のさなかに「彼ら」が脳を浄化しているとクリシユナムルティは言っています。これに関連して、ジャヤカールは次のように記しています。「プロセスが作用しているとき、ベッドに横たわった肉体は、抜け殻のようだった。肉体の意識のみがそこにあるように見えた。この状態では声は弱々しく、子供じみていた。それから突然、肉体は圧倒的な存在感で満たされた。クリシユナジは脚を組んで座り、目を閉じ、弱々しい体はたくましくなったように見え、彼の存在が部屋中を満たした。触知可能な、震えるような沈黙と、部屋にあふれ出す途方もない強靱さがそこにあり、姉妹を包み込んだ。この状態では、その声は途方もない音量と深さをもっていた。」

「彼ら」が誰であれ、彼らはクリシユナムルティの脳に働きかけ、それを浄化し、さらには鍛えていたようです。しばらくすると、「彼らはより多くの空白（エンプティネ

ス)をもちたすことができるように、私を焼いていたのだ。彼らは彼がどの程度まで入ってこられるか、見たいと思ってる」と述べています。「彼」とはおそらくマイトレーヤであり、その意識であつて、プロセスはそれがクリシユナムルティという存在の中に入れるようにするための一種の手術のようなものであつたことが示唆されています。また、その「空白」こそが重要なのだ、とも述べています。「力をもたらすのはこの空白なのです。ただし、それは通常の力、お金の力、地位の力、妻に対して夫がふるう力のことではありません。純粹な力のことです。ダイナモの中のそのよつな。」

また、一時的に痛みが去つたとき、彼は次のよう述べています。「奥深いところで、何が起つたのか私は知っています。私はガソリンを注入されていたのです。今、まさに満タンになつたのです。」それから彼は不意に、次のように言い及びます。

太陽と水分をたっぷり含んだ雨雲を見たことがありますか？ それらが太陽の上を通過すると、空っぽの子宮のように待ちわびている大地の上に雨がどつと降り注ぎます。

それはあらゆるものを洗い清めます。花という花を、葉という葉を。あたりには芳香が漂い、ものみな新しくなるのです。それから雲が通り過ぎ、太陽が現われて、あらゆる葉や花に触れます。冷酷な男たちによつて踏みつけにされる、いたいけな少女のような花に。裕福な男たちの顔を見たことがありますか？ 蓄財や金儲けに余念のない彼ら

は、愛の何たるかを知っているでしょうか？ あなたは木の枝に触れ、それを感じたこと、あるいはぼろをまとった子供の脇に坐ったことがありますか？ 車で空港に行ったときのことを憶えていますか？ 私は母親が子供のお尻を洗っているのを見ました。それは美しい光景でした。誰も彼女に気づいていませんでしたが。

彼ら「裕福な男たち」が知っているのはただ金儲けと悪所「売春窟」だけです。彼らに
とって、愛とはセックスに他ならないのです。

ナンディーニの夫が裕福だったことを考えると、これはなかなか辛辣な言葉です。それから彼は次のように言っています。「この苦痛は私の体を鋼のようにします　　が、お
お、とても柔軟でしなやかに。……それはみがきをかけるようなものです……」

このようにして姉妹は六月二十日までプロセスに立ち会い続けました。そしてオー
ティーを去るに際し、クリシュナムルティは姉妹に次のように謝意を表しています。「ボ
ンベイに戻って一休みしてください。あなた方は大きな試練に耐えたのです。「一連の出
来事はクリシュナムルティにとっただけでなく、以後彼と共に歩み続けることになった姉
妹にとっても大きな試練だったので。そしてプロセスが何であれ、それを経ることに
よってクリシュナムルティはより力強く彼の活動に挺身し、より多くの人々の声に真摯に
耳を傾けることによって、各自が歩むべき道を示すことができるようになったのです。

ナンディーニの受難

クリシュナムルティは、インドでの活動を通じてしだいに様々な社会層の人々に知られるようになり、特に結婚生活に悩んでいる多くの女性が彼との面談を求めてやって来るようになりました。そしてすぐに、結婚した女性たちを苛んでいた不安や悩みや悲しみに気づくようになったのです。「女に自立はなく、その生涯を通じて女は男に従属するべきである」という『マヌ法典』に示されたような旧態依然たる考え方が男女関係を縛っていたのです。そのため、公開トークの折に彼は「妻の義務」と結婚の役割について多くの質問を受けました。そこで彼は、一九四八年にプーナで行なったトークの際に出された「何が妻としての義務なのでしょうか？」という質問に次のように答えています。

この質問をされたのは妻でしょうか、夫でしょうか？ もし妻がしたのなら、それは一定の応答を求めます。もし夫がしたのならそれは他の一定の応答を求めます。この国では、夫がボスです。彼は法律であり、主人です。なぜなら経済的に支配しているからです。そして妻の義務が何であるかを言つのは彼なのです。妻は支配的ではなく、経済的に依存しているので、彼女が言うことは夫を義務で縛ることはないのです。この問題

は夫または妻の視点から取り組むことができます。もしそれを妻の問題として取り組むなら、彼女は経済的に自由でなく、教育が限られているか、または彼女の思考力が劣っているかもしれないことがわかります。そして社会は、男によって決められた規則や行動様式を彼女に押し付けてきました。それゆえ、彼女は、夫の権力と称されるものを受け入れるのです。そして彼の方が優位に立ち、経済的に自由で、お金をかせぐ力があるので、彼は法を敷くのです。当然ながら、結婚が契約の問題であるとき、その複雑さはきりがありません。そのとき「義務」関係において何の意味も持たない官僚主義的な言葉が生ずるのです。規則を立てて、夫と妻の義務と権利を調べはじめたら最後、きりがなくなるのです。明らかに、そのような関係はぞつとするような事柄ではないでしょうか？ 夫が自分の「権利」を要求し、従順な妻を持つことを主張するとき、それが何を意味しようと、二人の関係は明らかに売買契約以外の何ものでもありません。この点を理解することがきわめて重要です。なぜなら、確かに、それに対する別の取り組み方がなければならぬからです。関係が契約、金銭、所有、権威、あるいは支配に基づいているかぎり、それはいやおうなしに権利と義務の問題になるのです。関係が契約の結果であるとき、それがいかに複雑か 何が正しく、何が間違いで、何が義務かを決めなければならない を見ることができます。もし私が妻で、あなた 夫が一定の行為を私に強要すれば、私のほうは自立していませんので、当然私は、手綱

を握っているあなたの要請に屈します。あなたは妻に、一定の規則、権利および義務を押し付け、それゆえ関係はいっさいの複雑さを伴った契約の問題にすぎなくなるのです。

さて、この問題に対する別の取り組み方があるのではないのでしょうか？ すなわち、愛があるとき、そこには義務はないということです。あなたが自分の妻を愛しているとき、あなたはあらゆるもの、あなたの財産、あなたのトラブル、あなたの心配事、あなたの喜び、を彼女と共に分かちあうのです。支配したりしないのです。あなたは男で、彼女は使い捨てにされる存在、あなたの名前を残すための一種の子産みマシーンではなくなるのです。愛があるとき、「義務」という言葉は消えるのです。権利と義務について語るのは、心に何の愛も持っていない人です。そしてこの国では、権利と義務が愛に取って代わったのです。規則の方が、愛情の温かさよりもはるかに重要になってしまったのです。

愛があるとき、問題は単純です。愛がないとき、それは複雑になります。男が自分の妻を愛していれば、彼はおそらく、けっして義務と権利の見地で考えることはできないはずです。皆さん、どうか自分自身の心と精神をよく調べてもらいなさい。おそらく一笑に付するでしょうが、何かを笑って片づけることは、思慮深くない人間が使つてまかしのひとつなのです。あなたの妻は、あなたの責任、あなたの財産を共にしていま

せん。彼女はあなたの持つているあらゆるものの半分を持っていません。なぜならあなたは、女は男より劣るものであり、性欲が起きたら都合よく使えるように取っておくべきものとみなしているからです。そこであなたは、「権利」と「義務」という言葉を案出したのです。そして女が反抗すると、あなたは彼女にそれらの言葉をあびせるのです。権利と義務を口にするのは、淀んだ社会、退廃しつつある社会です。もしあなたが本当に自分の心と精神を調べてみれば、なんの愛もないことを見出すでしょう。もし愛を持つていれば、このような質問をしないでしょ。愛なしに子供を持ってどうするといふのでしょうか。愛なしに、私たちは心の醜い、未熟で、思慮のない子供を生むのです。そして子供たちは終生未熟で、無思慮のままでしょう。なぜなら彼らはけっして愛情を受けないまま、あなたのおもちゃ、慰みものとして、あなたの名前を継ぐものとして使われたからです。

新しい社会、新しい文化が生まれるには、男あるいは女による支配があつてはならないのです。支配は、内なる貧しさゆえに存在するのです。心理的に貧しいので、私たちは支配しようとし、召使い、妻、夫をのしるのです。然り、愛情、あの愛の温かさのみが新しい社会、新しい文化をもたらしうるのです。心情の要請は理知的精神の過程ではありません。理知性は心情を培うことはできません。しかし、精神の過程が理解されるとき、そのとき愛が生まれるのです。愛は単なる言葉ではありません。言葉は当のも

のではありません。「愛」という言葉は愛ではないのです。私たちがその言葉を用いて愛を培おうとするとき、それは単に精神の理的過程にすぎません。それでは愛を培うことはできません。しかし私たちが、言葉は当のものではないことを悟るとき、精神は、その法律と規則、その権利と義務でもって干渉することをやめるのです。そのときはじめで、新しい文化、新しい希望、新しい世界を創出する可能性が開かれるのです。

世界が直面している精神的、道徳的、社会的危機に対処するには、もはや小手先だけの「改革」ではなく、これまでの関係のあり方に根源的な「変容」「革命」を起こすことが急務だとクリシュナムルティは感じ、そのため沈滞した伝統的インド社会の担い手たちに鉄槌を下したのです。真に創造的な新しい関係をもたらずには、硬直した古いものの破壊・死がなければならぬからであり、聴衆の意識に風穴を開ける必要があるからです。

ナンディーニもまた、こうした状況の中で新しい生き方、今までとは違う道を模索していたのです。そして夫バグワン・メータとの関係は危機に近づきつつありました。クリシュナムルティに出会ってから数カ月後、彼女は夫に独身生活を送りたいと打ち明けたのです。事態は一気に険悪になり、義父のサー・チュニラル・メータは当惑し、彼のグルたるクリシュナムルティと息子との間で引き裂かれました。なぜなら、クリシュナジの教えがナンディーニに影響を与え、夫との肉体関係を断つように導いたと広く信じられていた

からです。彼女は未熟で、彼女の意思はその未熟さから生まれたのだと思ひ込まれていたのです。サー・チュニラルはクリシナムルティが介入して、ナンディーニに思いとどまるよう説得してくれるか、あるいはクリシナムルティが不在の間に彼女の気まぐれな決心が変わるよう期待したのですが、事態は緩和されませんでした。

メータ家は何代も続いてきた富裕な豪商で、女たちは顔を覆い隠し、歌を歌うことはタブーといった家風でした。そしてナンディーニの夫の母レディー・チュニラルは、口を堅く閉じ、滅多にしゃべらない、皺だらけのいかめしい顔つきをした老婆でした。彼女は、嫁いで来たばかりのナンディーニに、女は聞き取れないほどの声で話し、あまり笑わないようにすること、そして笑つてもいいが、ただし歯を見せないようにするように言い含めた、とジャヤカールは記しています。

裕福な名家での別れ話は、背後にいるクリシナムルティの存在とあいまって世間のうわさの種になり、やがて夫婦はとうとう決裂します。ナンディーニは子供たちを取り上げられ、実家に逃げ去りました。深夜、メータ邸から百メートルほど離れた母親の家に戻ったのです。そして翌朝、身も心も傷つき、息子たちの喪失に苦悶して、ナンディーニはクリシナムルティを訪ねました。

数日後にボンベイを去ることになっていたクリシナムルティは、彼女に次のように告げました。「一人で立ちなさい。もしあなたが自分が出たことは正しいと自分自身の中で

感じ、自己認識の深みから行動したのなら、後は生の流れに身を任せなさい。その水があなたを掴み、あなたを運び、あなたを支えてくれるでしょう。が、もしあなたが影響され「て行動した」のなら、お気の毒ですが万事休すです。ゲルなどどこにもいないのです。」

ナンディーニは一文無しでしたが、すでに父親が死んでいたため、いかなる支援もあてにできませんでした。夫のところに戻るか、それとも別居して、結末を見届けるしかなかったのです。母親は娘の窮状を見るに見かねて、クリシュナムルティを訪ね、母親として担いきれそうにない重荷について語りました。彼は、その重荷を降ろしなさい、それを担うのは自分の責任ですからと母親に言い聞かせました。彼女は泣きましたが、しかし彼の言葉は彼女の恐れを軽減したのです。

ナンディーニは夫の家には戻らないと決心しましたが、もし彼女が子供たちの保護のことで訴訟を起こせば、夫はクリシュナムルティの名前を、妻に影響を与え、夫との肉體関係を断つようそのかした人として持ち出すことでしよう。それでジャヤカールは、妹が訴訟に踏み出さないように説得すべきだとクリシュナムルティに相談します。彼はジャヤカールを長い間見詰め、それから「あなたは私を守ろうとしているのですか？」と尋ねています。それから、両手を意味ありげに上げて言いました。「私を保護しているずっと偉大な存在がいるのです。たじろぐことなく、ナンディーニと子供たちのために正しいことを行ないなさい。大切なのは子供たちです。彼女が勝つか負けるかは重要ではありません

ん。もし正しいのなら、戦いなさい。」

すぐにナンディーニは、虐待を口実に、別居と子供たちの保護を求めて、夫を告訴しました。娘は九歳、長男は七歳、次男は三歳でした。この訴訟は一九四九年の秋に尋問に進み、その頃クリシュナムルティはオーハイからインドに戻ってきました。この間、数人の女性がボンベイ、プーナ、マドラスで彼に面談を求め、内心の苦悶、悲しみ、不自由な身の上を告げています。

夫の弁護士は(一〇一)一〇五ページに紹介したプーナでのものを含む)クリシュナムルティの公開トークの一部を長々と引用しました。ナンディーニへの彼の影響を証拠立て、自分たちの言い分を強化しようとしたのです。ナンディーニの義父サー・チュニラル・メータはむろん息子を支持しましたが、彼のグル、クリシュナムルティについては何も言いませんでした。反対尋問中に、ナンディーニとクリシュナジとの交際を憤慨しているかどうか尋ねられたとき、彼は椅子から飛び上がるようにして、「いや、あの方は偉人中の偉人ですぞ」と大声で言いました。

彼によれば、悪いのはナンディーニと、彼女を助け、けしかけた姉のプブル・ジャヤカルだったのです。ナンディーニについて質問されたとき、彼はプーナで姉妹が大笑いをし、ナンディーニはサリーで顔を隠さなかったただけでなく、クリシュナジの隣に坐ると言い張ったと答えています。こつした彼女の態度は、クリシュナジのまわりの長老たちの

間に不安を引き起こしたというのです。が、チュニラル・メータはクリシユナジへの個人的批判はせず、ただ彼の影響力と若い未熟な精神に対するその役割を強調したにとどめて
います。

ただ、ボンベイ高等裁判所の裁判官はボンベイ市民であり、彼にとつては高名なサー・
チュニラル・メータ家に暴力沙汰が起こることなど考えられませんでした。かくして、虐待を口実にした別居の嘆願は立証されず、訴えは却下され、一時的にナンディー二の保護
下にあつた子供たちは夫によつて取り上げられたのです。ナンディー二はこれに対して上
訴し、ボンベイはこの裁判のうわさでもちぎりました。

この間、クリシユナムルティは何度かナンディー二に会っていますが、特別な同情は示
さず、彼女の内面に自己憐憫の余地を与えないようにしています。彼は、彼女が一つの人
生が終わり、新たな人生に目覚めねばなくなっているという事実には直面するよう容赦
なく求めていたのです。が、彼女の子供たちには限りない関心と同情を注いでいます。ナ
ンディー二は、夫に気づかれぬように子供たちを彼のところに連れていきました。長男
のガナシャム・メータは弱視で、視力が正常に戻ることはないだろうと医者に言われてい
たのですが、クリシユナムルティはよくその手を長男の両目の上に置いていました。やが
て、数年すると目が良くなり、後にカリフォルニア大学バークレー校で経済学博士号を取
得し、その後オーストラリアのブリスベン大学で教鞭をとることになったのです。

一九五〇年の初春、ナンディー二の告訴却下のニュースがインドの新聞で大きく報じられ、米国の「タイム」誌も「ドアマットの反抗」という見出しでこの事件を取り上げ、クリシュナムルティを「メシア」として言及し、彼がインド女性たちが「ドアマット（靴ぬぐい）」なみの扱いを受けていると話したと報じました。これは、彼がバンガロールで一九四八年に行なったトークで次のように言ったからです。「関係に根源的変容をもたらすには、私たちは自分自身から始めねばなりません。自分自身を見守ってみなさい、あなたが自分の妻子をどう扱っているか観察してみなさい。あなたの妻は女であり、そしてそれがその目的なのです。彼女は靴ぬぐい（夫のなすがままになる妻）として使われるべきだ、というわけです！ 御婦人方を見るのではなく、自分自身を見つめてごらん下さい。」同誌はまた、ナンディー二の要求をクリシュナムルティの名前と結びつけて報じました。現在もそうですが、アメリカは「遅れた」あるいは「前近代的」な国の事件を取り上げ、暗に自国が進歩した民主主義国であることを示唆することが好きなのです。ナンディー二の訴訟事件はその格好の題材となつたわけです。

五年間にわたる屈辱と子供たちとの別居生活のストレス、さらには周囲の批判的な冷たい視線に耐えてきたナンディー二は、一九五二年七月、とうとう体調を崩し、進行性の子宮頸癌を発症してしまいました。そして急遽、飛行機でロンドンに運ばれ、緊急手術を受けることになったのです。ジャヤカールはすぐに電報でこのことをクリシュナムルティに

知らせましたが、何の返事も寄越さず、あたかも表面的には交信が途絶えたかのようでした。が、姉妹が困難に陥っていたこの時期中ずっと、彼の無言の存在が感じられ、それが二人に災難に直面する力を与えてくれたとジャヤカールは記しています。

ロンドンの病院でかなり重症であることを知らされ、死が差し迫っていることがわかったにもかかわらず、ナンディーニは深い沈黙とともにそれに直面しています。ホテルでひどい出血に悩まされながら手術を待ち受けていた彼女は、その間ほとんどなんの不安も、恐れも、明日への気がかりもなく過ごし、手術の前日にはボンベイの子供たちに情愛のこもった電話をかけています。

後日姉に語ったところによると、麻酔をかけられている間にナンディーニは響き渡るような笑い声を聞き、手術中それが聞こえ続けたということです。意識は少しも遮断されていませんでした。彼女は自分が緑野の中を歩いており、微風が彼女に吹きかかり、鳥の鳴き声が彼女の耳に入ってきました。保護的な存在が彼女を取り囲み、包み込んでいるのが感じられました。その保護は彼女を生かし続けるためではなく、死生にかかわらず彼女と共にあるためにあつたのです。その保護、その存在は外科医のメスの中にもありました。そして手術が終わったのですが、その保護は右にも左にも、上にも下にもあり、ナンディーニはそれを確かに感じたというのです。

その後

不思議な保護のおかげもあってナンディーニは回復し、一九五〇年代には実家で母親と一緒に過ごし、心身の傷が癒されるのを待ったのです。ある日彼女はたまたま近所で孤児の二人の少女を見かけました。親に見捨てられて、彼女たちは遠縁の叔母のところまで暮らしていたのですが、昼間は路上生活をしていました。実の子供を奪われたナンディーニはこの二少女を引き取り、彼女たちや近所の貧しい子供たちのための私設保育園を開設しました。その後、保育園は近くのガレージに移され、やがて園児たちの数は百五十人ほどになりました。そして「バル・アーナンド」と名づけられたこの保育園には先生もヘルパーもやって来るようになりました。園児たちに音楽、踊り、機織り、絵画、算数などを教えるこの保育園は、開園から二十五後にクリシュナムルティ・インド財団の一部になり、ナンディーニは財団の一員になりました。そして成人に達した三人の実子は彼女のところに戻り、今度は子供の方が彼女を温かく支えるようになりました。姉のプブルの思いやりで満ちた協力が大きな支えであり続けたことは言うまでもありません。二人は実に仲の良い姉妹だったので。

そしてナンディーニはクリシュナムルティの親友の一人として、彼がインドにいるときだけ彼の講演旅行に同行し、外国にいるときは手紙のやりとりをしています。

今、髪には白いものが混じるようになりましたが、彼女は苦しみの後にたどりついた保育園でのかわいい園児たちとの生活を慎ましく送り続けていると、『伝記』の中で姉のジャヤカールは記しています。クリシユナムルティは、本書に収められた一連の手紙の最後から二番目のそれ（六十二ページ）の中で、「あなたはこれまで何年もの間、内向きの波に乗って奥へ奥へと引きこもってきたのですが、今度はその内向きの運動から一転して、外側に向かい、より多くの人に会い、輪を広げていかねばならないのです」と書いていますが、この促しに呼応するかのようには、ナンディーニは自分なりに外側に向かい始めたのです。

本書はそうしたインド人女性への温かい思いやりにあふれた手紙を収録したものです。が、それを書いていたクリシユナムルティの目にはまた、不自由な生活を強いられていた他の多くの女性の姿も映じていたにちがいません。いづなれば、現代にふさわしい生の革命家として蘇ったクリシユナ神として、彼はこれらのインド人女性たちだけでなく、自縄自縛に陥っている私たち現代人の多くをも真に解放された「自由なる生」へと誘う牧人の役を果たしてくれたのです。

古代インド人の感性について参考になるものとして、『インド思想史』(J・ゴンダ著 鍾淳訳 忠公文庫 一九九〇年)の第一章「ヴェーダ 潜在力への信仰と祭式、神々との交流」中の以下の一節を紹介しておきます。

……初期のインド人たちにあつては、勢力への信仰、勢力に対する恐れ、勢力の制御に役立つ祭祀、秩序と法則性の観念などに加えて、その作用に気付きながらも姿かたちは人間の知覚を超えた勢力と、直接交流しようとする傾向が著しく認められる。人間を取り巻く優勢な自然に対して、ごく限られた生活環境がどの程度影響を及ぼしたか、また以前からインドに居住していた先住民たちの、何事につけ忘我を好むらしい資質がどの程度影響したか、明らかでない。はつきりしていることは、初期のインド人たちが独自の思想や空想に閉じ籠もる傾向を持つていたこと、思慮や理解を超えたものに対しては、体験で得、知性で確かめた直観知を何にもまして愛用したことである。それはヴェーダ文献の比較的古い部分に現われている。事実、知性の及ばない意識下から湧き上がる表象や靈感が、すでに早い時期、インドのアーリア人たちの間に権威を持つていた。慧智への道は知性によらず、知性を超えた最高度の直観によるという現代インド教徒の確信も、非常に古くからインドに存在している。直観へのある種の敏感さ、幻想的な知識に適する鋭い感受性、また忘我の状態に合う特異な体質が、甚だ古い時代から、孤独な隠棲・苦行・社会生活の忌

避や、特定の領域は別にして世俗的な事象への批判的研究の停止などの傾向と渾然一体をなしている。

リグ・ヴェーダの中の多くの章句……は、すでに甚だ早い時期、供祭僧・祭主、さらに呪術施行者たちと並んで、おそらく供祭僧たちから“異別者”と見做されていた一群の人々があつたことを伝えている。彼らは祭式を依り所とせず、むしろ隠棲・沈黙・断食・麻醉剤・忘我の踊り、直観知・正常を超えた認識などによつて、知覚を超えた勢力との交流を目指していた。慧智を自らに招き、また自ら神と等しい状態に達しようとするこの沈黙・忘我の行者は、シャーマン、あるいは呪言師と密接な関係を持ち、後世インドの無数の神秘家たちの先駆と考えられるものであり、すでに早い時代から、敬意をもって扱われている。

参考2

クリシユナ

インド神話における、ヴィシユヌ第八のアヴァターラ（化身）である。その名は「黒い神」の意味で、数ある化身の中で最も重要であり人気のある神。ヴィシユヌの化身ではなく、単体の神としても崇拜されている。

前述したとおり、クリシュナはインドで最も有名で親しまれている神である。その様々の工ピソードは、長く語り継がれ、劇画されたり最近でも映画化される程で、知らない者はいないと言つてもよいだろう。インド人の名前に、クリシュナやその別名が多いのもそれを示している。ヴィシュヌが最高神までに登り詰めたのも、クリシュナをアヴァターラとして取り込んだからであると言つても過言ではない。

クリシュナの起源は、古くは『リグ・ヴェーダ』や『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』に見られるが、現在のクリシュナとの関係は明らかではない。

またクリシュナは、紀元前八世紀以前に実在したヤーダヴァ族の指導者であつたと考えられている。ダーサという、アーリア人に征服された民族という記述も見られ、非アーリア人だつた可能性も高い。クリシュナはその民族の中で、太陽神であるバガヴァッドを崇拜する新宗教を広めた。クリシュナの死後、彼はバガヴァッドと同一視され、クリシュナはバガヴァッドと呼ばれるようになる。この宗教の勢力が大きくなるにつれ、バラモン教の司祭たちはヴェーダ以来の太陽神であるヴィシュヌと同一視することによって、自分たちの宗教体系に組み入れたのである。この様な複雑な過程を経て、ヤーダヴァ族に発したクリシュナはヴィシュヌの化身となつたのである。

ヒンドウ教の第一聖典である『バガヴァッド・ギーター』は、元々クリシュナはヴィシュヌをバガヴァッドとして崇拜するバーガヴァタ派の聖典として編まれたものが、『マハーバーラタ』の中に組み入れられたのだろう。

ヴィシュヌの活躍は『マハーバーラタ』の中のクリシュナ伝『ハリヴァンシャ』や、『プラー

ナ文献である『バーガヴァタ・プラーナ』においてよく知られている。

クリシュナは、生まれ出た瞬間から神童であった。その後も数々の勇猛なエピソードを残すが、中でも有名なのがヤムナー河に住むカーリヤの退治である。また彼は、その美貌ゆえに全ての牛飼いの女性たちの誘惑者でもあった。他にも、宿敵であるカンサ王を倒すなど、その活躍は限りがない。その後、彼はヴィダルバ国のルクミニー姫を妃とし、兄弟であるバララーマと共に数々の戦争を駆け抜けて行くが、その最後は意外にもあつけない。ある時、森の中で瞑想していたクリシュナを鹿と間違えた獵師によって、唯一の弱点であるアキレス腱を射られて死亡してしまうのだ。彼の住んでいた街は海に飲み込まれ、クリシュナはヴィシシュヌの姿に戻り、天へと昇って行った。(インターネットで公開されている『世界神話事典』より)

